勿凝学問 125

民主党山本孝史さんと民主党の年金戦略
山本さんのご冥福を祈る

2007 年 12 月 23 日
慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

民主党の山本孝史さんが昨 12 月 22 日夜、がんで亡くなられた。
山本孝史さんの紹介は、山本さんの高校の同窓による次の記事に譲ろう。

（窓・論説委員室から）一日一生、一日一善、一日一仕事

2006/07/26, 朝日新聞　夕刊, 2 面

「朝、目覚めるとき、また、一日分の命を与えてもらったと思うようになった」
民主党参院議員の山本孝史（たかし）さん（57）は、災害や病気で親を亡くした子どもたちを支援する「あしなが育英会」の機関紙にコラムの連載を始めた。この育英会は山本さんの活動母体である。
山本さんは昨年末、胸部にがんが見つかった。5月の参院本会議で医療（いりょう）制度改革法案の質問に立ち、自らがん患者（かんじゃ）であることを明らかにして反響を呼んだ。
さきの国会ではがん対策基本法や自殺対策基本法の成立に尽力した。議員立法は簡単ではないが、山本さんの熱意が各党を動かした。
がんと宣告されて感じたこと、分かったことを遺言のつもりで子どもたちに伝えておこう。山本さんが寄稿（きこう）を引き受けたのはそんな思いからだ。
七夕（たなばた）に生まれたのにちなんで「銀の河」と題したコラムの初回の見出しは「一日一生、一日一善、一日一仕事」。
「どんな小さなことでもいいから、ひとつでいいから、良かったと思えることをしたい」とつづられている。
国会は終わったが、週1回、抗がん剤の投与があるため、この夏も東京にとどまる。がん対策基本法の成立を受け、政府がどう取り組むのか、患者団体とも連絡を取り合いながら見守っている。
コラムはとりあえず10回を予定しているが、がん治療は格段に進歩した。いつまでも続けてもらいたい。〈梶本章〉

2005 年 7 月 21 日に民主党政調会の勉強会に呼んでくれたのは山本さんである。山本さんががんを告知される数ヶ月前だった。
山本さんは、2004 年 3 月に出した『年金改革と積極的社会保障政策』を随分と読み込んでくださっていたようで、また、多くの記者の方々にも、山本さんはこの本を薦めてくだ

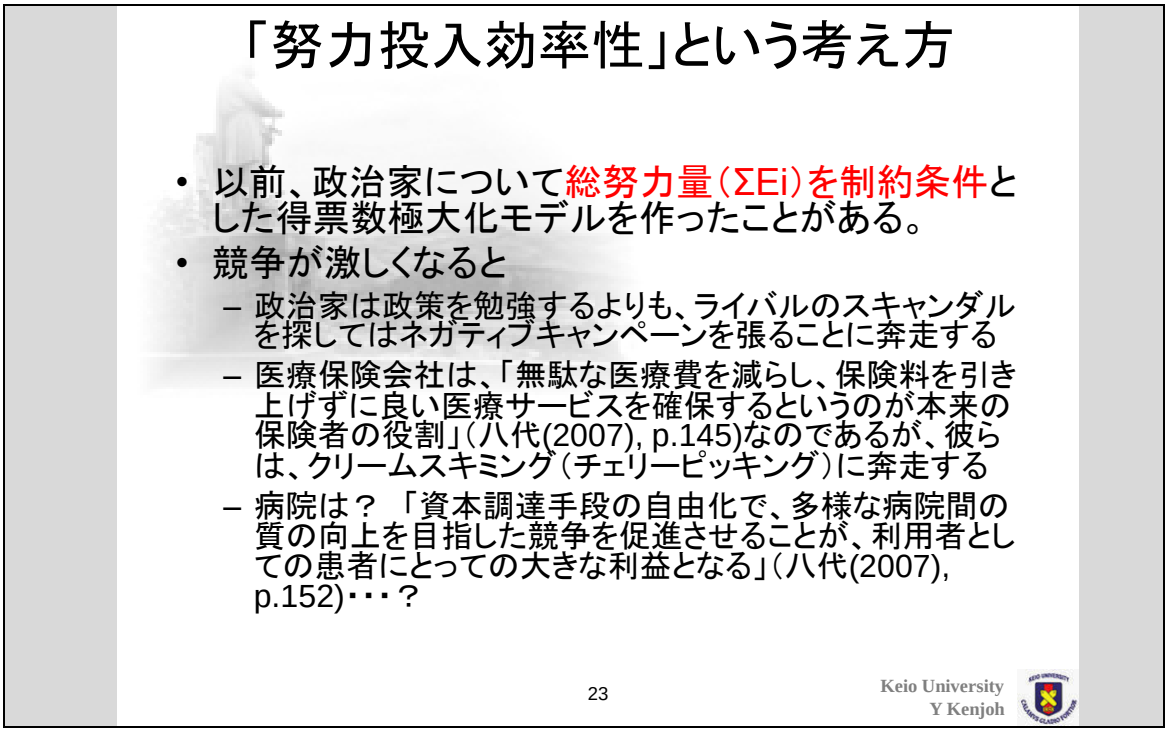
さっていたとも伝え聞いている。

その後医療でも、わたくしの論に関心を持ってくださり、国会で医療改革が盛り上がってきた頃、参考人として民主党側から出席してほしいとの連絡もあった。参考人は、以前からいずれの党からの依頼もお断りしていたので、その時も失礼させていただいた。

2005 年 7 月 21 日の民主党政調会の様子は、「勿凝学問 36　どの世界にもいるはずの気概のある異端たちへ――自民・民主の勉強会での説明の正確さを期するためのメモ」に書いている。民主党政調会で話をした後、山本さんが僕のところに来てご挨拶をされ、「今日の先生の話を、そこで聴いていた彼が分かってくれればいいのですけど」という言葉が印象的であった。山本さんは、この頃はすでに民主党の年金戦略の中心にはいなかったようである。しばしばわたくしが、民主党年金戦略における武闘派と理論派の闘いと呼ぶ中の武闘派が、山本さんのような理論派を締め出していたのだと思う。

勿凝学問 124 で書いた次の文には、山本さんのような真面目に政策を勉強する人が政治家として力を持ち得ないのはなぜなのかという忸怩たる思いを、実は強く込めていた。

勿凝学問 124　専門職者はなぜ働く、なぜ技能を磨く？
ここでサービス生産者と消費者の間の情報の非対称性がある職業のひとつとして政治家の行動モデルに触れますと、わたくしは彼ら政治家の行動については、努力総量を制約条件として得票数を極大化するという得票数極大化モデル考えていったりするわけなんですね。まぁ、これまでいろいろと変わったことばかり考えてきたのですけど、そこで私が言うのは、**彼ら政治家の競争が激しくなると、政治家は政策を勉強するよりもライバルのスキャンダルを探してはネガティブキャンペーンを張ることに奔走する。**つまり、競争という１つの言葉の中に、良い競争と悪い競争がどうもあるぞと、しかも努力投入をして、その努力投入効率性のいい方向にどうも行くというのが実態ではないのか。



また、10 月に社会政策学会で発表した論文「年金騒動の政治経済学――政争の具としての年金論争トピックと真の改善を待つ年金問題との乖離」には、次の文章がある。

> 会議では、井上義久議員につづく次の発言者の民主党山本孝史議員（民主党）がガラリと話題を変える――おそらく民主党年金改革案を最もよく知る山本孝史議員が、民主党年金戦略の巧言令色尐なし仁的性格の核心をつく井上氏の質問に危機感をいだいて発言を求められたのだと推測する。そして、井上義久議員からの質問には、その後、答えられないままとなっている。

これを読んだ、2004年年金改革に責任のある地位にいた方から、次のメールが届く。

> 「おそらく民主党年金改革を最もよく知る山本孝史議員が・・・」のくだりも、さすがの慧眼・・・と。

政治家、官僚、新聞記者、誰もが一目置く、論客であったと思う。

2004年の年金国会の時、テレビ中継でわたくしははじめて山本孝史という人を知った。その時、山本さんはわたくしが『年金改革と積極的社会保障政策』に書いていた基礎年金の「拠出時国庫負担」の話をされていた。そして2004年6月3日参院厚労委員会で「総理大臣、小泉さん、あなたの口からマクロ経済スライドは何だということを言ってみてください」と問い詰める山本さんの真摯な姿勢と、当時の首相の不誠実な態度とのコントラストは実に印象的であった。その時以来、山本孝史さんのことを意識していたのであるが、昨

日12月22日に亡くなられたそうである。

ところで、昨日12月22日の昼２時から、わたくしは、兵庫県県民フォーラムで、自民党、民主党の議員を前にして、「年金騒動の政治経済学」、つまり2004年以降の年金騒動は「公党と呼ぶにはふさわしくない政党により、年金が政争の具に利用されているだけ」という話をしていた[i]。10日ほど前に、パワーポイントと論文をフォーラム主催者の兵庫県医師会に送っていたし、兵庫県医師会は日医の方針に反して前回の参院選で民主党支持を表明していたので、わたくしの報告内容が、民主党議員のところに送られているだろうことは分かっていた。ゆえに、昨日のフォーラム当日は、後出しジャンケンとしての民主党サイドからの反論がなされることを期待していた。

民主党からは何人かの国会議員が出席し、政調会長もフロアーに参加されていたらしい。わたくしの民主党の年金戦略批判を聞いて、「人格まで否定されたようだ」との言葉を残して帰られた方もいたそうである。それでよし。

シンポジストの民主党議員からのわたくしの論への反論は他愛のないものであった。わたくしに一言反論すればそれ以上の言葉でわたくしから批判される。そんな感じだったと思う。

民主党の年金戦略が、どうしてこうなってしまったのか。山本さんのような理論派が武闘派に締め出されるようなことがなかったら、日本の年金論はどうなっていたのだろうか。

2007年12月22日、山本さんに年金研究で評価していただいたわたくしが、民主党の年金戦略を政調会長をはじめとした民主党の国会議員の前で人格否定と評されるほどに批判し、その夜、山本さんは亡くなられる。

記憶に留めておくためにこの雑文を書くとともに、山本さんのご冥福を心よりお祈りしたい。

最後に、フロアーから拍手が起こったわたくしの最後の言葉を引用しておく。

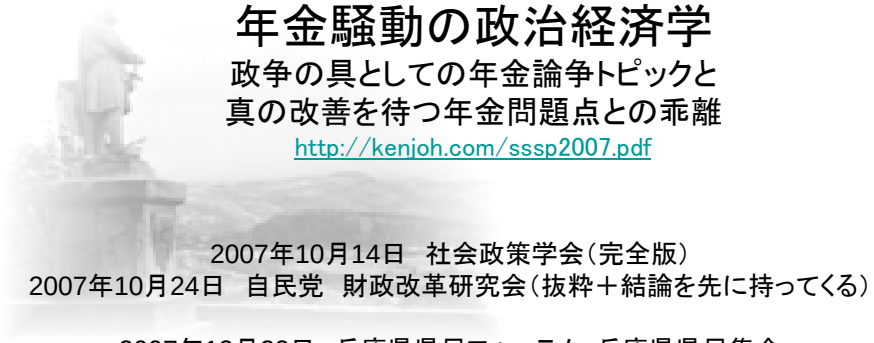
「1997年にイギリスの総選挙を目の前でみていた経験に基づいて言っておきます。当時野党だった労働党は、教育政策を充実するために第何子への児童手当を減らすというようなことをテレビで議論していた。財源調達論というのはそういうもの。霞ヶ関に埋蔵金があるはずだという与党、政権を獲らしていただいたら我々はやりますという野党、そんなものは財源調達論でもなんでもない。与党にしろ野党にしろ、この国は民主主義のレベルがあまりにも低すぎる」。

---

[i] 報告内容は、10 月に「社会政策学会」と「財政改革研究会」で報告したものと同じ内容を話した。「財政改革研究会」でも「社会政策学会」と同じものを報告した。なぜならば、政治家の前で話をするときは、相手の前でのオリジナルな話をするよりも、わたくしが学

会などの公の場で話していることそのものを、裏表もなく白黒もなく話した方が良いと、思っているからである。したがっていつも、「持ち回しのパワーポイントで申し訳ありませんねぇ・・・」と断りを入れて、話をはじめる。

次が、兵庫県県民フォーラムで使ったパワーポイントの１枚目である。



ちなみに、『福翁自伝』より――「時事新報」の執筆者へ向けた心得

> 私の持論に、執筆者は勇を鼓して自由自在に書くべし、他人の事を論じ他人の身を評するには、自分とその人と両々相対して直接に語られるような事に限りて、それ以外に逸すべからず、如何なる激論、如何なる大言壮語も苦しからねど、新聞紙にこれを記すのみにて、さてその相手の人に面会したとき自分の良心にはじて率直に陳べることの叶わぬことを書いて居ながら、遠方から知らぬ風をして恰も逃げて廻るようなものは、これを名づけて陰弁慶の筆と云う、その陰弁慶こそ無責任の空論と為り、罵詈ザン謗の毒筆と為る、君子のはずべき所なりと常に警めています。